

△紹介▽

ジョン・G・ガラハ著「パ
リの学生たちと一八四八年
の革命」John G. Gallaher, *The Students of
Paris and the Revolution of 1848.*

高村 忠 成

一、はじめに

本書は、表題からもある程度推察できるように、一八四八年の二月革命とパリの学生との関係、すなわち、換言すれば、パリの学生たちはその革命にどのようなにかかわっていったかという問題を取り扱ったものである。そして、これはまた、二月革命への学生たちのかかわり方を通して、当時のパリの学生層の様相と、その政治的行動様式を分析したものともいえるであろう。いずれにせよ、二月革命に関する著書、研究書が数多く存在するなかで、従来ふれられることがあまりなかった学生という観点を抽出し、そこから二月革命に光をあてなおした本書の

テーマはユニークであり、興味深いものであるといえよう。発刊も一九八〇年、きわめて新鮮なものである。

本書は、また、テーマの獨創性に加えて、その分析方法も極めて正統的でありながら、最新のものを導入している。すなわち、歴史の見方を、従来からの一定のパターン化した理論、概念を用いて行なうのではなく、詳細に個別史料を駆使し、その観点から新たな事実の発見、理論の再構築につとめるといふ方法をとっているのである。この方法はややもすると事件史的な記述におちいりがちであるが、研究者の力量によっては、まさにイデオロギー化した史観よりは、新鮮な事実を照射することが可能になる。本書の著者も、評者のみどころによれば、このような観点を踏まえて、二月革命の見方の新たな発見に努力し、実際、著者のその努力はかなり結実されているのではないかと思う。著者は、国家記録文書やパリ警察の記録などを詳細かつ厳密に調査し、当時のパリの学生たちの実態と動態を浮き彫りにしている。その結果、これから紹介するように、二月革命の起因、学生の政治行動の様式に、新たな事実が発見されたのである。

二、本書の構成と著者の意図

まず目次に従って本書の構成を概観し、つぎに、まえがきに沿って著者の意図、ねらいといったものを紹介しておこう。構成は、まえがき、序論、第一章 革命の背景 p. 1—31、第二章 暴動の発生 二月二二日 p. 32—55、第三章 暴動から革

命へ 二月二四日 pp. 56—77 第四章 学生と臨時政府 pp. 78—101 結論 pp. 105—107 からなっている。この構成が示すように、本書は、まさに二月革命の渦中そのものにおける学生たちの、その革命へのかかわり方を取り扱っているのである。

著者は、近・現代のフランスにおける革命の中で、学生とくにパリのそれが、人数は少なかったとはいえ、つねに重要な役割を果たしてきたのではないかとの問題意識にたち、近くは一九六八年の五月革命の例を指示し、さかのぼっては一八四八年の二月革命を手にとって、学生とその革命への参加という歴史認識の問題を検証しようと試みる。

そして、著者は本書で次の三点をとくに明らかにしたいと明記している。すなわち、第一に、二月革命前夜の学術社会（大学・グランゼコール grandes école・コレージュ college など）の状態を分析的に考察すること、第二に、王制の崩壊と第二共和制の創出という作業において学生が果たした役割を詳細に観察すること、第三に、二月革命直後の六月暴動において学生たちが臨時政府支持という行動をとった意味を考察すること。この三つの目標は、本書の中でいずれもていねいに、具体的に処理されているといつてよいであろう。

なお著者は、本書の執筆動機として、一九六八年六月に「学生革命」をパリ滞在中に直接目にしたこと、Joseph N. Moody 教授とその事件やフランスの学生の一般的な行動様式について討論する機会をえたこと、をあげている。そして本研究、本書のために、南イリノイ大学大学院研究プロジェクト・オフィー

スが財政援助を行ない、それによって著者は、パリで仕事を完成させることができた。

三、内 容

本書は、前述したように二月革命当時のパリの学生層の問題を、かなり詳細かつ具体的に記述しているが、本紹介においては、そのような具体的、個別的事象の紹介は紙数の制約などからむしる省略し、それらを通して著者が明そうとしている一般的、理論的側面に焦点を絞りつつ、著者の意図を要約していきたいと思う。

序論。ここでは、二月革命の背景となる七月王制時代のフランス社会、とくにパリの状況が記述されている。すなわち、七月王制時代、といつてもその末期には、政府に対する国民の不満が一般的に広がっていたが、その原因は、ギゾー政府の固定化した内・外政策にあった。とくに弱腰な外交政策に固執する政府と、栄光と名誉を欲する国民の間には、決定的な意識のズレが生じていた。ところが、政府はこうした国民の不満に気づかず、革命など起るはずはないと高をくくっていた。しかし、一八四六年以降の経済不況が、ついに国民感情を爆発させ、革命を誘発することになるのである。こうした過程の中で、学生の意識はどうであったかという点、大枠においては国民と同じ不満を懐いていたが、それ以外に、とくに学術社会固有の問題として次のような点をかかえていた。すなわち、政府の干渉と検閲制度である。具体的には、公教育省が、好ましくないと判

断した講座を取り消したり、政府に従順でない教師を罷免したり、教師の口を封じたり、その任用を拒否したり、また政府が講義の内容まで指定したりした。こうした学問の自由に対する政府の干渉が、七月王制末期になると学生たちの大きな不満へと膨張していったのである。

著者はこのようにまず、全般的な政治に対する不満と、学術社会固有の問題に対する不満とが学生層には存在しており、それが学生に反政府的態度をとらせることになる温床であったと指摘している。

第一章 革命の背景。ここではまず、七月王制期の学校教育の制度、学生生活の実態が詳細に述べられ（ここでいう学生とは、大学・グランゼコール *Grandes écoles*・コレージュ *collèges* など中等教育以上をうけているものをさす）、つぎに、政府と学術社会との関係、そして、七月王制末期の反政府運動と学生のかかわり方などが論じられている。これらの中で、とくに次の点に留意しておく必要がある。

まず、一九世紀中葉のパリの学生層の社会的経済的背景についてである。当時の学生層は、大多数が公証人、判事、医師、地主として法定市民などいわゆる中産ブルジョア階級の出身であり、またはその子弟たちであった。貴族や上層ブルジョアの子弟は宗教学校へ行き、下級官吏、商人、職人など下層ブルジョア階級の子供たちは、専門教育を身につけるといのが当時の一般的風潮であった。しかし、やがて下層ブルジョアの子弟の中でも、中等教育や大学教育をうけるものが少しずつ増えてい

った。いうまでもなくこうした学生層の社会的経済的背景は、革命における学生の政治行動様式を規定するひとつの重要な要因になる。著者は、当時のパリの労働者の一日の平均賃金は三・八〇フランであり、学生たちの生活水準はそれよりも高かったことを指摘している。

つぎに、政府と学術社会との関係についてであるが、これは一八〇三年三月十七日の勅令と、一八一一年一月一五日の勅令が七月王制下においても遵守されており、そのために、学術社会は、政府の要請には、政治的にも宗教的にも服従しなければならぬという関係にあった。要するに、大学などでの政府批判は許されなかつたのである。七月王制下においては、政府の学術社会に対する監視、統制は厳しく、学生はしばしば政府に抗議をするなど両者の間には摩擦が生じていた。とくに、政府が教員人事や、講義内容に干渉することに対しては、彼らは拒否反応を示した。しかし彼らの抗議、政府に対する抵抗といっても、その行動は極めて穏健なものであり、政府もそのような学生運動に対しては、あまり神経質にはならなかつた。

ところが、七月王制末期において、政府が三人の教授—*Adam Mickiewicz, Edger Quinet, Jules Michelet*—を解任、罷免した事件は、学生間に大きな波紋をなげかけた。これらの教授が反体制的発言を講義中に行なつたとはいへ、彼らに対する学生の信望は厚く、また、非常に人気があつたので、政府の措置は学生の不満を招いた。そしてそれまでの比較的穏健であつた学生運動に、火をつけた恰好になつたのが、まさにこの *Mic-*

Helet 教授罷免事件と改革宴会運動であった。ここに、第三番目の、王制末期の反政府運動と学生のかかわり方の論点が浮上してくる。すなわち、もともとは、穏健野党の議員を中心とする人々によって、政府に対する温和な抗議運動、議会改革要求を行なうという性格をもって出発した改革宴会運動は、やがて急進派によってもとり入れられ、かつ、学生の間にも広まっていった。Michalet 教授の罷免に対する抗議運動を、学生たちは改革宴会運動を通じて行なうことにしたのである。

しかし改革宴会運動に対し、政府から厳重な中止命令が出されると、野党議員はそれに従うことになり、学生の政府に対する抗議の機会は一時奪われることになってしまった。このような経過をたどりながら、著者は、ひとつの注目すべき事実として次の点を指摘する。すなわちそれは、学生とパリの労働者の間に友好関係が生まれたことである。もとより両者の関係は、一八三〇年の七月革命の時にもみられたことではあるが、当時の両者の関係は真の平等原理に立脚したものではなかった。だが一八四七年七月十四日には、学生と労働者の合同委員会が開かれ、ここにプロレタリアートとブルジョアジーの子弟たちが、明確に友情と団結を示し、両者の関係には、たとえ一時的なものであろうと新たな地平が切り開かれることになったのである。この点も、著者の大胆な視点の提起といえよう。

第二章 暴動の発生 二月二二、二三日。

二月革命は、かくしてまたも学生と労働者階級との団結、しかもそれはこの革命の時までのとは異なった、新たな友好関係

に立脚した団結によって、火ぶたが切られることになった。著者は、本章において、学生や労働者のデモ行進の動き、それに対応する政府軍の動向、革命勃発の機縁などを地図を示しながら、詳細に記述している。負傷した学生や護衛官の証言などをおりませながら、革命の経過や様子を詳細にふりかえっている。当時の状況をできるだけいいねいに再現しようというのが、著者の意図であろう。

こうした中で著者は、学生に関する問題として次のような諸点、特徴をあげている。まず、革命にかかわっていった学生たちが、どのような役割を果たしたかということ、ひとつはデモ隊を主導し、またもうひとつは、パリケードづくりに率先してあつたということである。まさにこの意味で、著者は学生が革命をリードするうえで、少なからぬ働きをしたと強調している。だが同時に、いくつかの留意しなければならないこともある。ひとつは、当時の学生は、理工科学校の学生のように制服を身につけていて、ひと目ではっきりと身分がわかる者は別として、多くの学生は、殆んど普通の服装をしており、学生か、労働者かを見分けることが困難であったということ。したがって、実際に、学生がどの程度、革命運動に参加していたのか、またそれをリードしたのかを判断することは、やや困難な問題をともなうであろう。著者は、結局、現存している当時の逮捕者や負傷者の記録、また証言、メモなどから学生の行動範囲、役割を類推している。

つぎに、ひと口に学生といっても包括的、概括的に扱えない

い面があることである。著者はここに理工科学校の学生たちの行動をとりあげ、彼らが革命前夜に果たした役割をのべる。すなわち、理工科学校の学生たちは、同校がもっていた権威によって、二月革命の時は、当初、無益な流血をやめさせるため、政府側と革命側の間に入って調停を試みようとしたのである、と著者は指摘する。しかしまた、同校の学生の中でも、調停にいかなかったものもいたし、逆に、革命側に組したのもいた。このように、学生といっても、その行動様式は、当然のことではあろうが、複雑性を帯びていたのである。

そして二月革命は、周知のように、事態の緊迫していることをやっと実感した国王ルイ・フィリップが、ついに首相のギゾーを罷免することによって、一時はおさまるかに見えた。もちろん、一部の労働者や職人は、七月革命の反省から、また今度も、革命を主体的になつた自分たちの利益は無視され、ブルジョア階級によって、革命の成果を独占されてしまうのではないかと懸念から、国王の妥協的措置にも満足せず、不信感を懐いていた。だが全体的には、革命の機運は、いったん終息の方向に向っていったといつてよいであろう。

ところがここに、二月二三日、カピシーヌ Capucines 街の虐殺事件が突然おこり、事態はいっききに革命へと進んでしまった。学生たちは、二二日に、学校中央委員会という、中央の統制力はそれほど強くなかったが、しかしそれでも、学生を抱括するものとしては大規模な組織を結成したが、これは二三日から効果的に作動しはじめた。とくに虐殺事件のニュースがつか

わるや、学生たちも武力衝突になることは不可避であるかと予測し、武装の準備に入つていった。だが、こうした過激な行動をとるようにせまられつつも、反面では、学生の中には、武力衝突をあくまで避けさせようとして、教会の鐘楼に入り、殺戮防止の警報を鳴そうとしたものもいたのである。

第三章 暴動から革命へ 二月二四日。

二月革命は、二月二三日のカピシーヌ街の虐殺から二四日にかけて一挙に燃えあがる。カピシーヌ街の事件で怒りを爆発させた民衆は、ただちに武器をとり政府軍と応酬する。事態の急変に狼狽した国王ルイ・フィリップは、ギゾーを罷免し、政権をモレに委ねる。しかし、うまくいかず、つぎにテイエールに打診する。だがそれでも、状況を好転させることはできなかった。ところが、国王は、一方では、このように首相を交代させるなどして、妥協のかまえをみせながらも、もう一方では、国王には忠実だが民衆の間では評判の悪いビュジョー Bugeaud 將軍を、首都制圧の最高責任者に任じ、一気に事態を暴力的に解決しようとはかった。しかし、パリ民衆の徹底抗戦の意志は固く、將軍の単純な作戦行動は功を奏さなかった。フィリップは、ついに最後の手段として、自ら軍服に身を固め、軍隊と国民兵を激励、鼓舞するために、閔兵におもむくことにした。だがその際、兵士、なかんづく一部の国民兵の間から、「改革方才！」との歓声があがり、彼への忠誠はもはや絶対的なものではないことが明らかになった。そこで、ついに彼は退位を決意し、孫のパリ伯に王位を譲って、自らはイギリスへ亡命したの

である。ここに七月王制はその幕を閉じることになったが、その後の経過については、周知のように、共和派の議員が主導権を握り、臨時政府が成立し、第二共和制が幕をあけたのである。

こうした二月二四日から臨時政府成立までの舞台のうえで、学生たちは、どのように行動し、いかなる役割を果したのであるうか。ここに著者は次の分析を行なっている。まず大きく分類すると、学生思想傾向としては、法律、医学を専攻する者には、急進派がみられ、彼らは憲法改正と、国家権力からの学問の自由を強く要求した。だが、そうだからといって学生たちは、概して根本的には共和主義的ではない。またもう一方の理工科学校の学生たちは、殆んどが、学校の性格からいっても急進的ではなく、革命の渦中にあっても、中立的立場から流血の惨事だけは何とかくいじめようと行動した。しかし、彼らの中にも、ごく一部ではあるが過激な民衆と革命行動に参加したのものもいたし、また他方、逆に、政府軍に協力して、民衆を弾圧したのものもいたのである。

こうした思想傾向をふまえたりえて、つぎに、学生のとった行動の特徴としては以下の点が指摘される。まず、法律、医学を専攻している学生で、革命派に加わったものは、パリケードをつくるうえにおいて積極的であった。彼らは労働者たちと同じく武装をし、パリケードを護衛したのである。また、とくに医学部の学生たちは、戦闘が激しくなるにつれ、負傷者が出る、献身的に彼らの救護にあたった。しかもその際、その立場は中立的であり、革命側であろうと、政府軍であろうと彼らは

応急処置を施した。これによってかなりの数の尊い生命が救済されたのである。

また革命運動が激しくなっていた中で、学生行動において、やはり理工科学校の学生たちの動きを見落すわけにはいかない。まず彼らは、基本的には、いくら既成の制度には不満であるとはいえ、王制の枠内での穏健な変革が、自分たちの基本的要求であることを確認した。そして、革命運動に対しては、中立的立場をとることに決定し、政府軍と革命派の間に入って無益な流血の惨事がおこるのを阻止しようとした。具体的には、いくつかの集団に分れ、パリ市内のそれぞれの区におもむき、そこで実情に即した解決策をとることにしたのである。理工科学校の学生は、周知のように、政府軍からも革命派からも、将来の国運を担ってたつエリートとして崇められ、畏敬の念をもつてみられていた。だから、彼らがよびかけ、提案することには、大体うけ入れられたといつてよい。ただ基本的にはこのような態度をとった同校の学生たちにも、中には多少の例外もいた。ここに著者は、パリ十二区、十一区、八区、一区、七区などでの、それぞれ小集団に分れ行動した、理工科学生の実態を分析する。とくに、十一区などでは、国王に忠実な国民兵といつしよに、革命派を弾圧し、また逆に、ラテン区あたりでは、革命派と共に、パリケードを指揮したりするものもいたのである。

そして、二月革命中、理工科学生が果した役割の中で目立たないかも知れないが、重要なものにチュイルリー宮殿の礼拝堂

や、ルーブル宮殿の国有財産などを守ったことがあげられる。すなわち、国王の退陣と共に革命派は、これらの建造物にだけ頼み、すべてを破壊しつくそうとしたが、理工科学生たちは、それをやめさせるべく説得したのである。この意味で彼らは、フランスの文化遺産を救ったといえよう。また、彼らは臨時政府が成立すると、その安定のために尽力した。すなわち政府の一員のようになって、政府から市民に対する伝令をふれまわったりしたのである。

なお著者は、本章の結論として、臨時政府に対する学生たちの態度を指摘する。それはまた、真の平等観に立脚したはずの労働者、職人たちの態度と、決定的に分離する性格のものであった。すなわち、臨時政府に対して、労働者、職人はあくまで不信の念をかくさず、かろうじて、共和制が宣言されたこと、閣僚に社会主義者が名をつらねていることで安心したにすぎなかった。これに対し、学生たちは、全般的には、王制の転覆が彼らの目的ではなかったが、しかし共和制の宣言で満足した。彼らとしては、学術社会の諸条件さえ改善されれば、それで十分だったのである。換言すれば、国家の社会・経済構造の変革までには、関心はなかったのである。貧困者に対しても、同情はするが、一生懸命に働き、節約すれば、貧乏は克服できるのではないかというのが彼らの社会観であった。社会・経済構造の変革によって、貧困を追放しようとする思想とは、根本的に異なっていた。ともあれ、こうした学生たちのブルジョア的態度は、六月事件において、一層、鮮明になるのである。

第四章 学生と臨時政府。二月革命が終了し、臨時政府が成立すると、それをめぐって状況はめまぐるしく進展していく。たとえば、政府がつきつぎにうちだしていく新基軸、具体的には、社会秩序の維持、国営工場の設置、労働者のための政府委員会の発足、普通選挙制の布告、等々である。ところが、このような新政策や、また憲法制定のための国民議会の性格などをめぐって、ブルジョア共和派と労働者との間には、やがて意見の相違、亀裂が生じ、ついに両者は全面的な対立へと入っていく。すなわち、臨時政府成立↓国民議会発足↓六月暴動へという史上、周知の流れをたどっていくのである。本章はこのような過程を背景に、学生がいかなる行動をとり、また、政治的な役割を果たしたかについて論じている。ここでは内容を四つの観点に大きく分類し、著者の意図を紹介することにしよう。

まず第一に、臨時政府が成立した時に、学生たちが果たした役割とその行動についてである。彼らが臨時政府を支持したのは当然だが、その政府に協力して、治安の回復、秩序の維持に積極的につとめたのは、またも理工科学生たちであった。彼らは、その名声と権威を十全に活用してことを処したのである。たとえば、彼らが行なった主たる仕事をここに列挙してみよう。臨時政府下の治安の維持、各種略奪行為の阻止、パリケードの解除、国民兵と協力しての警備、王家財産の保護、兵士の武装解除、食糧補給路の確保、政府から地方への命令や通知の伝達などである。また、理工科学校それ自体は、政府の役人や兵士たちのための宿舎、ホテルとして使用された。新政府確立

の基礎作業ともいえるこれらの任務を、理工科学生が果してくれたことに對し、政府は彼らに感謝の意を表明した。

ところがここに、新政府の基盤が固まっていくにつれて、革命とともに戦ったかつての仲間である学生と労働者の間には、状況認識に関してだんだんズレが生じてくることになる。すなわち、まず理工科学生は、その多くが、秩序の回復を第一義としたということである。彼らは政府を支持したとはいえ、決して共和派ではなかった。人民に同情したとはいえ、その信条に共鳴したわけではない。あくまでも、事態の安定につとめたのである。また、他の大学生たち、とくに法律と医学部の学生は、選挙権の獲得と集会の自由、なかならず大学の自由が最大の目標であったので、二月革命は極めて満足すべきものとなった。最終的勝利ともいってよかった。一方、労働者や職人にとってみれば、その革命はあくまで手段でしかなく、それを通して社会・経済体制の変革をはかるのが目的であった。それゆえ、臨時政府がうち出す様々な政策も、たしかに自分たちを対象としているものにはちがいないのだが、どうも矛盾を孕んでいるように思えてならなかった。所詮既存の体制のうえでの応急処置でしかなく、彼らはより抜本的な革命を望んだのである。変革で満足する学生、革命を志向する労働者たち、この両者の差は、日を迫うごとに拡大の一途をたどっていくのである。

さて、臨時政府は、その社会の内部に利害を異にする層をかかえつつ、歩みを進めていくが、とくに結社の自由を認められた時、まさに雨後のたけのこのように数々の結社が誕生した。そ

うした結社の中でも、やはり多いのは、学生のそれであって、パリのクラブは、その主たるリーダーは学生であった。そして、やがて学生たちは、二月革命に貢献した代償を臨時政府に求めるようになるが、その主な内容は、たとえば、美術学校の学生たちが要求した、自分たちの才能を国家の利益のために使って欲しいというようなものや、理工科学校の学生のように制服、帯剣を認めてもらいたいというようなものであった。また、理工科学校の学生は、土木局の再組織計画を国民議会に提出するように依頼した。こうした学生側の要求に對して、臨時政府はどのように対処したかという点、成立直後の体制がまだ脆弱であったころは、要求を聞いていたが、だんだん基盤が固まっていくにつれて、やがてそれらの声を無視するようになっていったのである。

つぎに第二の問題として、二月革命の国際的波紋と、学生たちの行動がとりあげられている。周知のように二月革命は、当時のヨーロッパ諸国に大きな影響をおよぼすが、その中であつて、とくにパリの学生たちは、その波動に関心を払った。またそれに呼応するかのようには、革命の影響を強くうけたドイツ、オーストリア、イタリヤでは、学生たちが自国の改革にたちあがった。パリの学生たちは、それら諸国の学生たちを、兄弟とか同志とかよんで親愛の情を示したが、この中でもとくに、自由主義運動を積極的に推進したウィーンの学生には強い支援を行ない、パリでは、ウィーンの学生を激励する宴会を盛大にひらいたのである。もちろん、パリの学生たちはまた、ポーラン

ドやイタリアの状態にも同情を寄せたりするが、このような学生たちの国際的運動の中でも、とくに注目すべきことは、学生たちが、二月革命は、全面的な勝利であったと宣言していることであろう。それ以上の革命をもちや望むものではないことを彼らは、他の国々にもはっきりと表明したのである。こうした中で、四月二三日、国民議会の選挙が行なわれた。憲法の起草とそれまでの間、共和国の統治を任務とするこの議会の選挙は、いうまでもなく、普通選挙制で行なわれた。第三の問題として、本章では、この国民議会に対する学生の態度が検討に付されている。この議会は、極めて保守的な色彩の濃いものになるが、ブルジョアジーはそれに満足し、労働者、職人は不信の念を懐いた。そして、その不信感は、ポーランド問題に関する論議で火をふき、労働者たちはパレブルボンへのデモ行進を行なう。これが五月十五日事件であるが、学生は、この事件があまりにも突発的に発生したのでほとんど参加していなかった。もちろん、学生たちはそのような時間的理由だけではなく、結果的にも、それ以上の政治変革にかかわるつもりはなかったのである。ただ、理工科学校の学生は、社会の秩序を維持するという中立的立場から、国民議会を擁護するために出動した。そして、パリの学生たちと、労働者たちとの道が、決定的に分離するのは、いわゆる六月暴動である。学生にとってみれば、臨時政府は、彼らの要望を聞いてくれたし、選挙も国民議会も実現されたし、すべて満足できるものであった。しかし、それに対して労働者や職人にとってみると、革命が行なわれた

にもかかわらず、過去の二回の革命の時と同様に、またしても自分たちは何もすることがないように思えた。現実は何もかわっていないのである。そのため彼らは、より徹底した変革を望むが、その感情に火をつけたのが、六月二一日の国営工場の閉鎖であった。政府がついにその欺瞞的態度を暴露し、労働者たちをきりすてようとしたのである。少なくとも彼らの目にはそう映った。ここにパリの労働者や職人たちは、またしてもたちあがり、再びパリケードを築いて反政府的態度をとった。

第四点目として、この六月暴動に対して学生たちは、どのような姿勢をとったのであろうかという問題がでてくる。著者は、既述の流れをふまえて学生は暴動に消極的であった旨の指摘を本章で行なっているが、ただそこにもいくつかの特徴がみられる。ひとつは、この頃は、学校が休暇に入っていて、パリには学生が少なかつたということ。また暴動に加わった学生もいたが、逮捕されたりして記録がある限りでは十数名ぐらいであったろうということ。要するに暴動にかかわった学生の数は、極めて少数であったわけである。ただし、その中でも、理工科学校の学生と医学生が目をひく。すなわち、前者は、パリケードの撤去作業に積極的に参加し、後者は、負傷者の手当に尽す。とくに、医学生は、心情的には政府、国民議会を支持したが、しかし、負傷者に対しては、人道的見地から暴徒であろうとも治療したのである。かくして、二月革命に対する学生の態度は、旗色が鮮明になったといえよう。著者は、その点を次の結論で再確認している。

結論。本書の論点がここでは明解にまとめられている。本紹介も、それを追うことによつて、最後の要約をしておきたいと思う。まず、一八四八年当時のパリの学生たちは、社会、経済体制の根本的変革、いわゆる革命をめざしていたのではなかったといえる。もちろん彼らは、一般的な国民感情と同様に、七月王制下の重く政治的奮闘気には不満はもっていたが、それよりも切実に感じていた点は、学問の自由、学術社会の自治に関する問題であった。したがつて、あえていえば、その点さえ改善されれば、彼らにとつては満足であつたのである。ところが、革命中、協力関係にあつた労働者、職人たちと根本的に違ふところであつた。ただそうはいつても、二月革命が勃発する時は、学生たちは、その不満を思い切り七月王制にぶつけた。いな、二月二日の学生の革命への参加、行動、主導性こそが、改革を望んでいたパリ市民に、過激な反政府行動をとらせるきっかけ、導火線になつたともいえるのである。労働者階級がやがて革命に積極的になるや、学生の行動は影が薄れるが、しかし、二二日の学生の参加がなかつたならば、果たして革命はおこつていただろうか。歴史に仮定を導入して論ずることは、無意味であるといつてしまえばそれまでだが、著者は、あえてこのように問いかける。それほど二二日の学生の行動は影響力があつたとの主張である。

そして、このような主導的役割を演じた学生の行動には次の特徴があつた。第一に、理工科学校の学生たちの役割である。それは、あくまでも流血の惨事が拡大しないように、王党派と

革命派の間につつ、いわば仲裁的なものであつた。第二に、医学部の学生たちは、負傷者の治療に献身的にあつた。そして第三に、学生たちの革命的行動は、最初から計画的になされたものではなかつた。彼らの目的は、政府に対する抗議とデモであつた。ゆえに新政府が樹立され、学術社会への統制と憲法が改正されたことは、学生にとつてみれば大成功であり、彼らはそれに満足した。ところが臨時政府の樹立では満足せず、それに不信をもつ労働者、職人たちは、国民議会が、自由主義的王党派と、保守的共和派から構成されたのを見て、憤慨した。反対に、学生たちはそれでよかつた。ここに両者の亀裂は決定的になるのである。そして、六月暴動が発生するが、学生たちは二月革命の時のように、それに参加しなかつた。参加するものがいても、せいぜい個人的なものでしかなかつたのである。

四、おわりに

本書は、いうまでもなく歴史的事件をとりあつたものであるから、その事件に関する著者の見方、解釈の仕方を少し詳しく分析し紹介してきた。既述の内容でわかるように、本書の取り扱つてゐる素材、テーマはあまり類例をみないユニークなものといえよう。評者自身も本書を手にした時、その興味ある素材にひかれて本書をここにとりあげてみた次第であるが、最後に若干の気づいた点をのべておきたい。

まず、たびたび触れてきたように本書のもつ特徴は、二月革命への学生のかかわり方という点に焦点をあててゐることであ

る。近代フランスにおいては、学生は、諸革命になんらかの形でかかわってきたが、その態様や学生層の詳細な内容、などについては、従来必ずしも綿密にとりあげられることはなかったといつてよい。ただし、一九六八年の時などは例外であるが……この意味で著者が、あえてその部分にくい込み、社会的、また政治的に分析のメスを入れたことは斬新な試みといえよう。

よく指摘されるように、二月革命はあらかじめ、何人かによって準備され、予定された革命ではなかった。現状不満から起こった大衆の自然発生的運動（中木康夫氏）が、革命を惹起したとみてよからう。著者はこの点について、その運動を革命へと発展させる契機になったのが学生であったと指摘している。もちろん、学生にも革命の意図が事前にあったわけではなく、むしろ、彼らにとつては、学問の自由獲得のみが大きな目標であったのである。ところが、彼らが反政府デモや集会に加わる中から、やがて、民衆をリードし、その情熱を革命へとかりたてる結果になってしまった。著者は、何ゆえ学生にそのような力があつたのかは触れていないが、学生のもつ知性と行動力がそうさせたのであろうか。いずれにせよ、二月革命勃発時における学生存在の重みについてのこの指摘は、本書のひとつの主要なテーマになっている。

ただ次の問題として、ひと口に学生といつても、すべて同等に扱うわけにはいかない。学生個人によつても、また、学校の違いによつても、その行動様式には大きな差異がみられた。こ

の点が、第二番目におさえられなければならない問題である。もちろん、学生がとつた行動様式には、一定の線はあるが、個々にみれば、すでに紹介してきたようにながりの相違が存在するのである。

第三に、学生層と労働者階級との間のぬきさしならない断層についてである。変革運動に協力したとはいえ、両者は基本的には社会的基盤や運動の目標を全く異にしていた。両者を（革命に参加したということで）同等に扱うこと、同一視することは、いうまでもないが避けねばならない。

これらの点をはじめ本書は、多くの啓発すべきものをもっているが、あえて評者なりに一言つけくわえておけば、二月革命の口火を切つたのは学生とはいえ、その存在や機能を過大評価することは、逆に危険であろう。かれらは、ひとつの社会的な階層を形成していたとはいえ、政治社会に対して、強力な、独自の利益をもつ存在というよりは、当時としては、むしろ上・中ブルジョア階級の一員であったと解釈しておいた方がよからう。とくに、その政治行動様式を理解する場合は、その角度から考える方が、あえてとりたててひとつの階層としての学生のそれを強調するよりも、無難である。ただし、もちろんそうはいつても、このことは、革命への学生のかかわり方、それ自体を研究することの無意味性をいっているわけではない。むしろ、二月革命およびその後の過程を理解するうえで、本書のような観点を認識しておくことが有用であることはいうまでもない。

なお蛇足ながら本書を讀んでいて思うことは、二月革命と一九六八年の五月革命の時との比較である。二月革命では、学生は自分たちの要求を一応獲得し、臨時政府を強く支持した。それに対し、労働者階級は、その要求をみたしえなかった。ところが、五月革命では、まだ記憶も新しい方もおられると思うが、総選挙の結果はドゴール派が勝ち、その時点でラジカルな学生運動は、生活条件の改善のみで満足する労働者におし切られてしまった。学生は挫折し、労働者は大幅な賃金の引上げを獲得した（内藤貞氏）のである。労働者と学生は、両革命の直後の時点では全く逆の結果となったのである。もちろん厳密にはこのような単純な比較は許されないだろうが、それにしても、この二つの革命の間の一二〇年という年月の開きは、フランスの社会経済構造を大きく変化させ、学生層を構成する階級、階層の様相を変えてしまったことは、当然のことながら、事実のようである。